

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別民衆読物誌第六二七号
平成二十四年五月一日発行 定額百十五番第五号

ホトトギス

五月号



俳句随想 〔三百五十九〕

汀子

この度、すでに出版した句集『花』に続いて『月』を出版する。その後書を書いたのであるが、初めに松山への船上句会での虚子とのエピソードを書いた。その句会で私の「月の波消え月の波生れつつ」という句が虚子選に入った。その句会では他の選者が取ってくれた「月見えぬ側のデツキに月の波」という方が私自身も得意であった。それは虚子選には入らなかつた。あとで私は虚子に「あの句は選んで頂けませんでしたね」と話した時、虚子はこのこと笑いながら「あの俳句もよかつたね」と言ってくれたので私は句集に入れることにした。しかし、よく考えてみると、「月見えぬ……」は理屈が先行しているのかも知れないと思う。「月の波……」はそのまま描写し、波に消えたり現れたりする月がその時の情景としてすぐに私の頭の中に浮かんで来る。俳句は理屈ではないということを虚子は没という方法で私に教えてくれたのであろうか。「あの句もよかつたね」と言ってくれたが、それは私に与えてくれた俳句への執着を解いてくれたと見なければならぬ。自分で得意になっていた句は「月見えぬ……」であつたが、その執着があつても、今では「月の波……」の方がよかつたと私も分つて来た。自信があつた句に、執着を解いてくれる褒め方を私は胸に大切にしまっている。

旬日記 汀子

平成二十三年五月一日 下朝句会

旅を機に少し早まる更衣
真夜覚める雨はじまる月細し
牡丹の崩るるも承知の雨の牡丹にかな
崩るるも承知の雨の牡丹にかな

五月三日 ロイヤル吟行会

快晴といふ惜春の会となる
歩かうよ初夏の太陽浴びながら
青春の情漲るも浜ホテル
海見ゆる十四階の夏近し
会場のホテルの庭の風五月

五月五日 「競王」出句

昔子と競ひ泳ぎし海を訪ふ
大橋を渡る旅路を選ば夏

五月七日 菅屋ホトギス会

風の棲みはじめしマロニエの若葉
十本の薔薇の香り束ねけり
明日母の日と忘れぬし贈り物
マロニエの若葉に紛れ易き花穂

五月十日 大阪倶楽部

牡丹の崩るるときの一斉に
その辺の色抜きんでて牡丹咲く
風を身に纏うて初夏の旅衣
牙を剥く卯浪と知りて怖れけり
何よりも身軽となりぬ更衣
卯浪見てみて被災地に置く心

五月十日 綿業倶楽部

こまごまと日差揺らして若楓
明るさをひろげてゆきぬ若楓
祭とて目立たぬことも承知して
復興へ勢ひの祭ありしかな
五月十二日 清交社

木洩日を攫ひ行く風葉桜に

子育ての昔は昔子供の日
葉桜の庭に水音風更衣
身軽さに従ふ家居更衣

五月十三日 悼 浅井青陽子様

かけがへのなき牡丹の命とて
淋しさに五月の龍野覆はれし
五月十三日 工業倶楽部
松風と聞き松蟬の声と聞く
ふと心添はぬ立夏の朝の冷え

五月十四日 四国ホトギス同人会

旅先に届きし訃報 五月閣
昼寝してゐて正体はまだ見せず
旅に持つ今日は日傘として使ふ
五月十五日 四国ホトギス俳句大会

土佐の月仰ぎ天寿の人悼む

明易し旅の時間の余るほど
明易し天寿全うせし命
快晴の似合ふ五月の天守閣

五月十七日 有恒俳句会

少し渦巻ける卯浪を越えて旅
被災地に戻らぬ活気祭来る
新緑のトンネル十九抜けて旅
たなはる土佐の山々新緑に
席埋めて四角に囲む更衣

五月十七日 無名会

橡若葉狭庭を覆ひはじめけり
更衣色混乱交差点
若葉より抜け出してゐる色もあり
庭師来て青芝少し刈り込める
若葉とも青葉ともマロニエ大樹
マロニエの花の所在又失せて

五月十八日 夏潮句会

月満ちて五月の陽気定まりぬ
引電を打ち新緑の庭に出る
芹一花見に入れ替る二階かな
青芝のやうやく育つ気配かな

上京の長期滞在てふ五月
水音のつづき松蟬つづかざる
五月十九日 倶楽部合同句会

更衣旅の自由を樂しみて
買ひ足せし金魚の所在知りし
身に合はぬと捨てられぬ更衣
水音に放つ金魚として馴染む
五月二十六日 きさらぎ会

五月二十六日 きさらぎ会

みちのくの災害語る余花となる
訪ね来て如くに余花の山路にけり
月上げて余花しらじらとありけり
いけめんは今の世のこと業平忌
又雲に入りし着陸業平忌
五月二十七日 時雨句会

五月二十七日 時雨句会

鯉降らせし空に月赤し
夜の新樹閣一枚となる迅さ
ラベンダー一塊の香のあるところ
鯉帳より風抜きし夕べかな
刻々といふも予定をこなす初夏
五月二十八日 句会と講演の会

五月二十八日 句会と講演の会

松蟬や西から天気下り坂
持ちて来し仕事やりくり梅雨に入る
太陽を開ち込めてゆく袋掛
いつも寄る蕎麦屋に梅雨の傘たたむ
雨止んで緑洗はれたる都心
年一つ重ねねし仲間集ふ夏
ふり向けば若き日々あり青嵐
はや梅雨に入りし東京集ひけり
この会は雨に縁あり明易し
会場の徽を払はん開け放つ

五月三十一日 春菜会第二句会

青空も雨雲も梅雨入りし街
明易し動き出したるスケジュール
皆年の取り定めは未定明易し
来年の予定は未定明易し
昨日会ひ今日は別る明易し

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十三年五月一日 野分会普屋例会

夏めくや折角だから今夜どう
ラベンダー生命力といふ異臭

五月四日 白石公園夏鳥探鳥俳句会

新緑を彩る鳥の声であり
探鳥といふ春光の贈物

薰風に和して鳥語の降りて来る
その中に視線を集め青葉木菟
青葉木菟孤高の背でありにけり

五月五日 虚子記念文学館投句

新緑の館新しき船出かな
五月七日 伝統俳句協会埼玉部会吟行会

秩父嶺を染め上げてゆく黄沙かな
杖つけば皆登山めく歩みかな
鯉幟連ねて水子地藏守る

五月九日 「俳句界」特別作品二十句

夏めくや会ひたき人に会へばなほ
原子力空母帰りて夏めきぬ
通し鳴人に見られてゐる静寂
天守閣跡淋しめず藤咲けり
花は葉に句碑を沈めてをりにけり
薫風を生む羽ばたきでありにけり
鳴き声で判る夏鳥との出会ひ
見られるといふ恥ぢらひに青葉木菟
街の景田植の景と変りゆく
山藤やマイクロボスに触れもして
がんばらう日本合言葉に盛夏
新緑に鐘の音溶けてゆきにけり
鐘の音に老鶯和してをりにけり

一山の筈となりて鐘涼し
源流を確かめもして川涼し
藤繫ぐ秩父路つなぐ景となる
水無月や羽を休める枝の上
合歓の花見下してゐる鳥語かな
鷺一羽青田の景となりゆけり
日傘傾けてより探鳥の歩に
道をしへ探鳥会の果ててなほ

五月九日 朝日カルチャー若草句会

大陸といふ麦秋の一枚に
鯉幟四万十といふ川幅に
笈を見つけてよりの山親し
麦秋の風麦秋の日差かな
一姫に鯛二太郎に鯉幟
五月十二日 NHK学園西宮俳句大会出句

五月十二日 土筆会

若楓名園といふ日差かな
一行詩新茶を淹れてより消ゆる
更衣人には言へぬ恋をして
心学を志したる更衣
文まだ癒すに非ず若楓

五月十四日 四国ホトギス同人会 大会

新緑を近付けて飛機傾けり
チンパンジー大人は昼寝子は燥ぎ
猛獣の居らぬ動物園薄暑
老鶯も動物園の一過客
十段で涼しく登城諦めし
城薄暑こころ辺りも丸の内
薫風や刃物が趣味といふ漢
五月十七日 草木瓜会

青空に纏れ葉桜とはなれり
こんな日はちよつと日焼もえんちやふ
川幅が卵浪を呼んでをりにけり
渦巻いて卵浪をつかり合ふところ
力士乗る自転車歪む薄暑かな
時計草十二時五分差す薄暑
笈は確かこの辺だつた筈

五月十八日 蕉心会

伸び切りて筈山の屋の顔
一蹴に筈終の叫びあぐ
菖蒲湯の香をバスタオル受け止めし
穀象の昔の色をして現るる
五月二十四日 若水句会

五月二十五日 目黒学園句会

飛機一機茅花流しに飛び立てり
蚕豆を剥いて痴言をさめけり
蜘蛛生れて早速空を恋うてをり
蜘蛛生れて人の原罪背負ひけり
跳ぶことも覚えて蜘蛛の育ちゆく
詩を詠む形に茅花流しかな
五月二十五日 目黒学園句会

蚕豆を育て教区の老司祭
幽玄を闇に返して薪能
とびを飛ぶ日本海を銀に染め
とびを飛ぶ地球に果てがあるやうに
味にこだはれば蚕豆塩でせう
金春に帳下り来る薪能
芝暮るるより薪のう始まり

五月十八日 ホトギス社句会

松蟬の日表といふ昂りに
袋掛稲城の空を近付けて
長老はみてゐるだけの袋掛
五月二十九日 野分会東京例会

ラベンダー風を染めゆくほどにかな
夏めいてきたから今日は焼鳥屋

雑詠

廣太郎 選

京の筆濡らす若水ひとしづく 神戸 藤井啓子
 万葉の恋はおほらか若菜摘 同 同
 寒灯下季寄せに残る母の文字 同 立村霜衣
 クリスマスプレゼント寝息に贈る 同 同
 子の枕許がもつともクリスマス 同 同
 子の夢に話しかけてもみる聖夜 同 同
 賑はひは戌の刻より酉の市 同 山田佳乃
 真夜中のジオラ艶めくクリスマス 同 同
 注連縄のささくれ立ちてゐる寒さ 同 同
 冬の薔薇モーツアルトは旅に果つ 熊本 岩岡中正
 翁忌や楽しきことに身を削り 同 同
 枯野ゆくとき夜盗めく二三人 同 同
 初句会みななつかしく改り 榎原 稲岡 長
 独楽廻す紐引くこつは教へ難 同 同
 左義長や古き禍事祓ひ給へ 同 同
 句の道といふが恵方でありにけり 奈良 古賀しづれ
 天地に宿る神々杜冴ゆる 同 同
 万の幹万の燈籠淑気満つ 同 同

門松の竹の切つ先ホテル前 東京 今井千鶴子
 暖房にひとりのランチ窓に富士 同 同
 雪の富士その日昨日のごときかな 同 同
 しろがねの帯を解きて雪女郎 神戸 涌羅由美
 その吐息かかりてみたき雪女郎 同 同
 まだ反りを正せぬままに初暦 同 同
 飾取る松の重さによるけつつ 柏 田丸千種
 どんど焼火の裏側へ人混める 同 同
 鴨鴨 鴨鴨 鴨鴨 杭の上 同 同
 初雪といへど悔ること勿れ 京都 安原 葉
 極月の稿債減らしきれざりし 同 同
 深谷葱九条葱とて京市場 同 同
 障子より小鼓洩るる楽屋口 東京 大久保白村
 口切や卒寿の点前ゆるぎなく 同 同
 蝶を黄に染めて放ちし石路の花 同 同
 かたづけぬこともをりあひ年の暮 同 橋本くに彦
 寒禽の声の幅増しマルカート 同 同
 寒天の磴駆け上がる豆剣士 同 同
 新婚の吾に先住の嫁が君 神戸 長山あや
 存在は影と音のみ嫁が君 同 同
 曾祖父の年玉いつも真珠玉 同 同
 赤い羽根サラリーマンよOLよ 徳島 岩田公次
 美しきゆゑ毒茸と言はれたる 同 同
 秋晴の切なき一事ありにけり 同 同

雑詠句評（四月号より）

暮潮・仁義・昭代

純也・一步・雅

くに彦・しげ人・佳乃

比奈夫・廣太郎

月の名の変り変りて十三夜 我孫子 副島いみ子

約二十数年前、私がマニラへODAで派遣される前、英語のプレゼンテーションのテストがあり、それぞれの趣味のことを英米人教官の前で話した。たとえばゴルフの話などについては、彼らは全く興味を示さなかった。私は俳句の話をした。わかりやすくするため、名月前後の月の名の話をした。多くの英米人教官たちから、矢のような質問が集中して、私はその説明に窮した。名月と後の月との相違など聞かれたら、どれだけ巧みに説明したらわかってくれるだろうか。

日本人特に俳句作者の皆様には説明の必要はあるまい。

（暮潮）

古来日本の詩歌に詠み込まれてきた最も美しい言葉の代表であるところの「雪月花」は、勿論俳句の上では季節であるが、その中の一つ「月」が詠まれた句である。天体としては一つであるが、その満ち欠けの言葉の種類多きは日本語ならではの。そんな中の一つ「十三夜」が美しく輝いている。（廣太郎）

突然の人の変事や身にぞ入む 朝倉 井上弘堂

ある人に、全く思ってもいなかった大きな変事が生じた。そのときに痛いほどのショックを受けた作者の心が、痛切にあらわされた句である。ある人とは、作者にとつて掛替えのない大切な人であったにちがいない。その人に生じた大きな変事は、作者にとつて痛いほど骨身に感じるものであった。作者は、そのときに受けた自分のショックを「身にぞ入む」と「ぞ」で強調して表現した。作者にとつて、これ以外に人の世の「あわれ」を表現する方法がなかったのである。（仁義）

筆者がこれを認めていた時期、筆者よりも若い方がお二人も突然この世を去られ、今更ながら運命の過酷さを考えている。この句も、そんな体験をなさった作者なのであろう。客観的に叙述されているが、作者も平成二十三年十二月三日に御他界あそばされた。季節の重さが伝わってくる。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

みづうみへ煌めきて降る冬の雨
雨の音雨だれの音鳩の声
省略も暮しの智慧や日短
短日の心ばかりが先走る
極月を驚かしたる訃音また
会場にご披露されし新暦
豊年を射貫く新幹線鐵路
出来秋を車窓に嵌めて賀へ急ぐ
明るさへ退院したる冬至の日
初空へ真つ新となる心と身
貝殻を踏んで冬立つ思ひあり
俳諧に悴むといふこと知らず
老を忘れ老を忘れず去年今年
去年は去年明けてめでたき今年も
燠に諸さがしんどを終へにけり
風花も吹き飛んで来し舞鶴港
看取る身に咳一つとて侮れず
星屑の散り山眠る七つ森

神戸 長山あや
同
尼崎 中村芳子
同
京都 安原 葉
同
東京 稲畑廣太郎
同
吹田 宮崎 正
同
熊本 岩岡 中正
同
神戸 後藤比奈夫
同
榎原 稲岡 長
同
仙台 赤川誓城
同

東京に闇なき聖夜降りてくる
家になき極月街にありにけり
風下に悴みし顔振り返る
かじかみし子等と手繋ぐ右手左手
独楽澄みて澄みても遂によるめける
一編の詩終ふごとく独楽倒る
あるがままとて極月でありしかな
怒濤より水揚されしずわい蟹
屋根雪を風のぼら撒く日和なる
歩行者を見てほぼ解る雪の嵩
船来ても人来てもただ浮寝鳥
増えることなきと思ひつ賀状書く
わが干支の竜は金色初暦
一碗の七種粥の湯気みどり
燠べ足して炎歪めるとんどかな
禁酒して寝るほかはなし寒の内
窓を打つ凧ひとり暮しかな
これからのこれからのこと冬めきぬ

龍ヶ崎 今橋真理子
同
東京 橋本くに彦
同
大阪 蔦 三郎
同
東京 河野美奇
同
熱海 嶋田摩耶子
同
同 嶋田一步
同
東京 今井千鶴子
同
神戸 三村純也
同
我孫子 副島いみ子
同

子選

天地有情句評

汀子

豊年を射貫く新幹線 東京 稲畑廣太郎

豊かな稲田を抜けてゆく新幹線。自然と人間。

初空へ真つ新となる心と身 吹田 宮崎 正

新年を健康となつて迎えた決意と喜び。

雨の音 雨だれの音 鳩の声 神戸 長山あや

雨と雨だれの音に誘われた哀愁の声。

短日の心ばかりが先走る 尼崎 中村芳子

長寿を美しく全うされた短日の心。

極月を驚かしたる訃音また 京都 安原 葉

驚きと悲しみ深き極月。

俳諧を説く一筋の道。

老を忘れ老を忘れず去年今年 神戸 後藤比奈夫

長老としての生きる智の新年。

風花も吹き飛んで来し舞鶴港 檜原 稲岡 長

風花までが荒々しい日本海。(以下略)